

年会改革に関する助言。

- (1) 会期を1日延長して4日とする。ただし、延長は2009年の名古屋年会からとし、年会直後にその評価を行う。4日の会期で2年連続して年会を開催し、評価を2回実施することが望ましい。評価は広く学会構成員の意見を求める。

事務局から：第50回、第51回については4日間で開催することを確定。その後については次期執行部に検討を依頼します。

- (2) 講演等の重なりを減らし、同時に、国外からの参加を促すため、以下の諸点を検討する。

- 1) 口頭発表、ポスター、シンポジウムの時間的重なりを少なくする。特に、ポスターは年会の中心として比重を増す必要があり、講演との重複を避ける（並行して進行する会場の数を8会場程度とし、シンポジウムを厳選するため、シンポジウム採択の委員会を年会準備委員会とは独立に設置することが望ましい）。
- 2) ポスター、口頭発表の図、表等はすべて英語表記とする。国際シンポジウムを一定数取り入れる。
- 3) 国外からの参加を促すため、参加費を会員と同額にする。また、旅費の援助も考慮する。

事務局から：第49回年会について、国外非会員参加者については、会員と同額とする予定です。

- 4) 年会参加登録を英語表記とする。

事務局から：第49回年会から、英語により参加登録が出来るように変更中です。

- 5) 年会の国外開催を視野に入れる。

(この助言にいたる経緯と資料を以下に添付しています)

植物生理学会年会ワーキンググループ 島崎 研一郎

西村会長の諮問により設置された“年会ワーキンググループ”によって、“植物生理学会年会の改革に関するアンケート”（資料1）が評議員、前評議員各位に対して昨年実施されました。

アンケートの要点は、

○プログラムが密になり、講演が重なり聞きたい話が聞けない、

○ 国外から参加しづらい、

などの問題点があり、現在の3日の会期を4日にする事に賛・否の意見、年会に関する意見、要望を伺う事です。アンケートの結果は以下のようでした。

（1）会期について

4日に延長することに、

賛成 50名

反対 20名

どちらとも言えない 20名

（回答者：90名、未回答者：112名）の回答がなされ、延長に関して過半数の評議員、前評議員が賛成でした。

（2）意見と要望について

以下の5つが多く見られた意見でした。詳細は資料にある通りです（資料2）。

- 1) シンポジウムが多すぎる、一般講演との重複を避けたい。
- 2) 口頭発表を減らしてポスターを増やす。
- 3) 本部企画、受賞講演の開催方式（例えば、講演時間を短く）、日程の変更が必要。
- 4) ポスター中心の年会にして、英語で表記する。
- 5) シンポジウムの一部（または、すべて）を英語にする。

6) その他、諸々の意見

○会期等に関して

緊張が失われ、間延びする。

金銭的負担が大きく、全日程の出席は無理。

一日の講演時間を延ばして、早朝から深夜まで頑張る。

他の学会や卒業式と重なるので開催時期の変更を。

卒業式を避けるため3月25日以降の開催を。

他の学会と組み合わせて会期の延長を（植物学会、農芸化学会——）。

プログラムの組み方に工夫を行い、関連セクションを2日程度に集める。

初日と最終日を特色あるプログラムに（初日に総会、受賞講演、本部企画など）。

授賞式、受賞講演をモーニングレクチャー や一般講演の形で分散させる。

研究室ごとの発表数の制限。

開催地の負担が増加するため、開催地が限定される。

会場数がへらせるので、開催地も増やせる。

場所、形式を固定する。地方周りは植物学会等で。

懇親会は不要。

若い人のために一般講演を残す。

講演が最終日に割り振られる人への配慮。
植物科学の特化した学会として分子生物学会などと区別せよ。

○国際化に関して

日本の学会はきちんとした日本語でやるべきである。
講演は徐々に（将来的にはすべて）英語で行うようにする。日本語の要旨集を廃止する。
シンポジウムはすべて英語で行う。今、変えないと手遅れになる。
国際シンポジウムを組み入れる。
開催地に韓国、台湾、シンガポール、中国を入れては。
国外から参加しにくいのは会期が年度末であるからではないか。9月なら参加しやすい。

以上の、賛否の回答状況、意見、要望をふまえて、また、発表数と参加者が大幅に増大しつつある現状等（資料3）（例：1980年の195演題、シンポジウム2、会場数4から、2006年の921演題、シンポジウム14、会場数14）に基づいて、WGから上記の助言を行います。